

# 奈良・平安時代と蓮田 —水からの恩恵と古代の生業—

7世紀に入り全国を統一した大和政権は、隋(ずい)や唐(とう)の制度を手本とした律令国家(りつりょうこっか)を造りました。和銅3年(710)には「平城京(へいじょうきょう:奈良)」を都とし、全国に「国・郡・郷」を設置し、国ごとに国府を置き国司を派遣して治めさせました。また、政府は国家基盤の強化のために産業・技術や仏教など大陸文化を積極的に取り入れました。遣隋使(けんずいし)・遣唐使(けんとうし)の派遣、渡来人(とらいじん)の登用、聖武天皇(しょうむてんのう)による東大寺(とうだいじ)と全国の国分寺(こくぶんじ)・国分尼寺(こくぶんにじ)の建立(こんりゅう)などがその例です。やがて、延暦13年(794)に都は「平安京(へいあんきょう:京都)」に遷(うつ)されますが、この時代の終末には古代の律令社会の根幹をなす土地制度が崩壊し、地方の武士団が結成され、次第に力を発揮するようになります。

埼玉県は現在の東京都や神奈川県の一部と共に「武蔵国(むさしのくに)」に属し、武蔵国には当初19郡、後に高麗(こま)郡・新羅(しらぎ)郡を加えて21郡が置かれました。

国府(こくふ)は府中市、国分寺・国分尼寺は国分寺市にありました。埼玉県域に属した郡の当時の総人口は約10万人程度という推定もあり、蓮田の地は南北に長い埼玉(さきたま)郡に属していました。平城京からは、天平18年(746)に「武蔵国男衾(おぶすま)郡から豆製品や干し魚を当時の政府に納めた時の木簡(もっかん:貢納物(こうのうぶつ)の木製荷札)」が出土しています。10世紀中頃以降になると平将門(たいらのまさかど)の乱(939~940)にみるように、武蔵国内でも武士の台頭が目立つようになります。やがて、坂東八平氏の秩父氏の一族や武蔵七党など武蔵国に基盤をもつ武士団が育ち、活躍するようになります。

8世紀の奈良時代には、「奈良の大仏」に象徴される大規模な国家的事業が推し進められ、前述の国分寺や国分尼寺が建てられ、各地に瓦(かわら)や須恵器(すえき)を焼く窯(かま)などが作られた工房が設けられました。市内でも、鉄の生産が行われていたことが荒川附遺跡や椿山遺跡などで判明しています。市内では奈良時代の遺跡が9ヶ所、平安時代の遺跡が18ヶ所、**貝塚2ヶ所**も確認されていますが、その**多くは製鉄に関連した遺跡**です。出土している鉄の分析結果では、**砂鉄を原材料とした製品**であると判明しており、全国的な鉄生産と同じ形態であることがわかっています。

市内で発見されているのは小鍛冶(こかじ)工房跡が多く、砂鉄から鉄の塊(かたまり)を作る大鍛冶(おおかじ:製鉄炉)や、燃料となる木炭を焼く窯などは多くは発見されていません。この砂鉄は台地が洗われ流れ出た砂鉄が蓮田の地の川辺で堆積し、これを活用していたものと考えられます。

『黒浜(くろはま)』の地名の発祥は、**砂鉄の黒に由来**するとも考えられます。発掘では「金屎(かなくそ)」と呼ばれるものが多く出土しますが、小鍛冶精錬の際に発生するもので実際には『ゴミ』です。一部は再利用され、製品の形状を整える際の台座として利用されているものもあります。

また、この時代には土錘(どすい)と呼ばれる土製の錘(おもり)が出土し、玉状と管状に分類されます。**漁労(ぎょうろう)用**や**編み物用**と考えられ、ここにも水の恩恵が推察(すいさつ)されます。市内で出土する多くは、玉状を中心に小型のものが大部分を占めますが、荒川附(あらかわづけ)遺跡(関山3,4丁目)では流れの速い上流域で発見されるような大型の土錘も出土しています。



## 武蔵国と埼玉郡

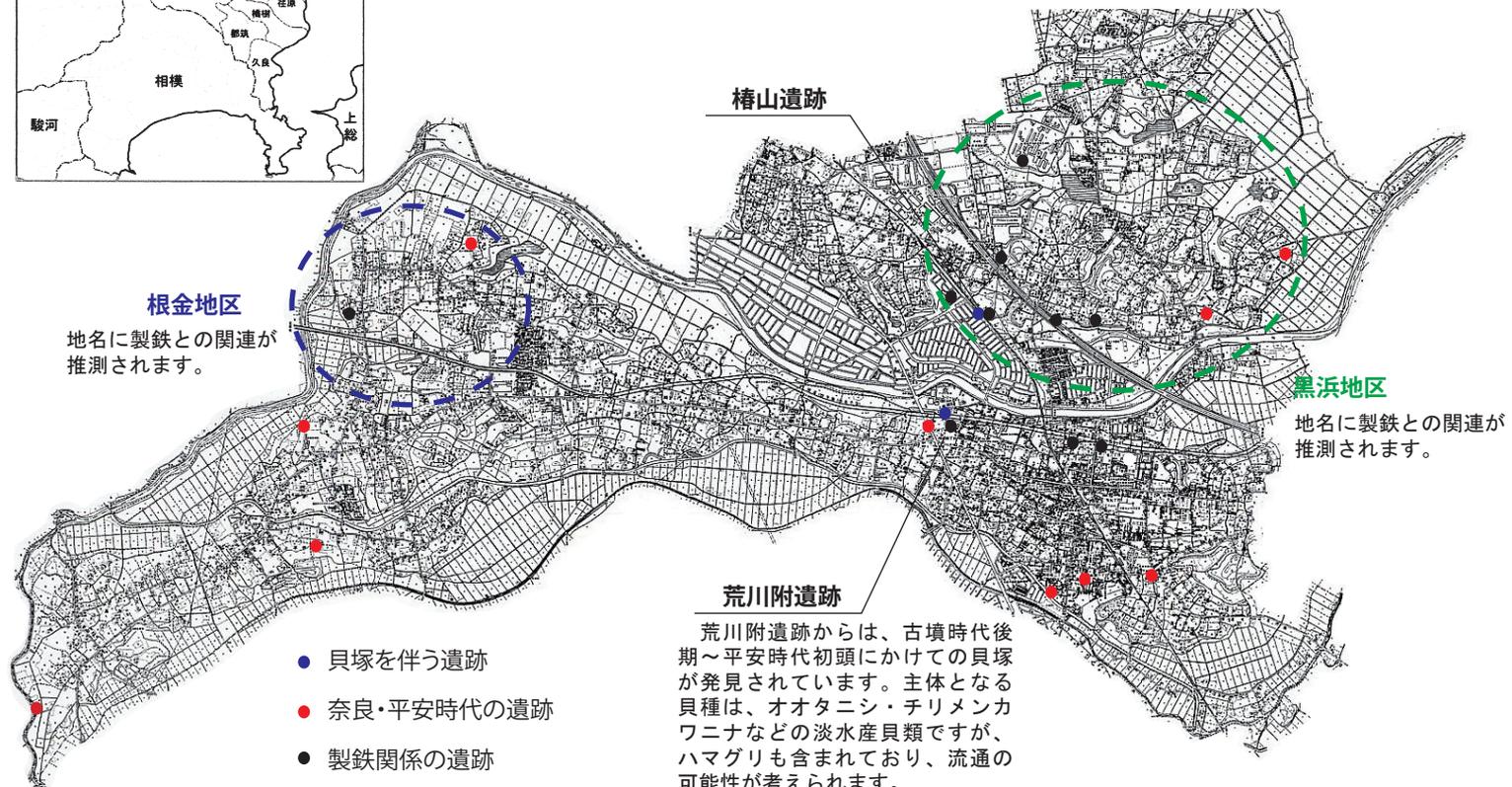
埼玉郡は武蔵国の北東部に位置し、蓮田は埼玉郡のほぼ中央に位置します。埼玉郡の郡役所は発見されていませんが、行田市にあったとされる説が有力であり、元荒川は行田へ上る舟運の中継点であり、**荒川附遺跡はその河岸場に当たる遺跡**と推測されます。



小鍛冶工房跡 (荒川附遺跡)

## 平将門の乱と椿山遺跡

市内の製鉄集落でも椿山遺跡は、平将門の乱が起こった頃にピークがあり、勢力下にあったことから、その時期には武器製造の一翼を担っていた事も推測されます。

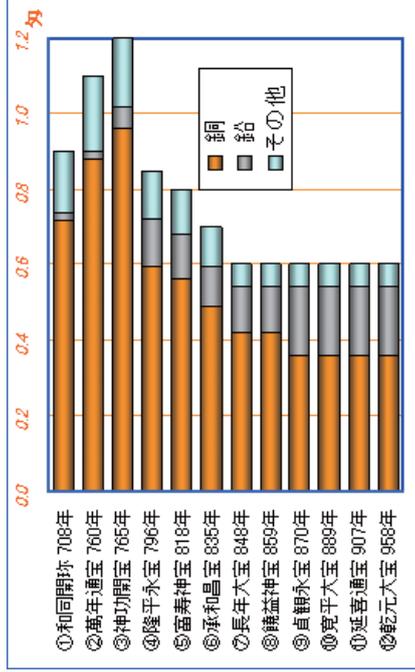


# 承和昌寶(じょうわしゅうほう)と皇朝十二銭(こうちゅうじゅうにせん)

承和昌寶(じょうわしゅうほう)は、『皇朝十二銭(こうちゅうじゅうほう)の』の一つで第6番目に製作された貨幣です。埼玉県内からは、現在のところ蓮田市**榑山遺跡**(市役所)出土品が**唯一の出土例**です。承和2年(835)に発行されたもので、**初めて年号を冠した皇朝十二銭**でもあります。また、承和昌寶の鑄造(ちゅうぞう)量は10万貫前後と推定されています。

皇朝十二銭は、慶雲(けいいうん)5・和同元年(708)の「和同開珎(わどうかいちん)」の発行から、最後の天徳(てんとく)2年(958)「乾元(けんげん)大宝(たいほう)」の発行まで、250年の間に12種類が発行されました。近年では皇朝十二銭に先立って、天武12年(683)頃に「富本銭(ふほんせん)」と呼ばれる貨幣が鑄造され、708年に発行された和同開珎より年代は古く、日本で最初の貨幣とされる説もあります。この貨幣が実際に流通したのか、たんなる厭勝銭(いやかちせん)にまじらない用に使われる銭)として使われたに留まったかについては学説が分かれています。富本銭は昭和

皇朝十二銭の成分比と鑄造年代



※ 皇朝十二銭の重さと成分の概略値。  
重さも大きなばらつきがあり、例えば和同開珎の実際の重さは、0.5~1.0匁が多い。

## 【貨幣製造空白の時代】

乾元大宝の天徳2年(958)製作後、江戸幕府による寛永通宝(1636年)の製作までの**約700年間**、**国家による銭貨鑄造が途絶えました**。原因は銅の産出量不足と考えられています。しばらくの間は、「絹・布・米」が貨幣に代わって使われていたようですが、12世紀中頃からは中国から輸入された銭貨「渡来銭(とらいせん)」が取って代わり、寛永通宝ができてからの間に貨幣経済の基盤が整ったと考えられます。

44年(1969)に平城京で最初に、平成3年(1991)にはさらに古い藤原京で発見されました。この頃から最古の流通銭かどうか大きな問題となりましたが、平成7年(1995)には群馬県藤岡市上栗須遺跡からも発見され、平成11年(1999)には奈良県飛鳥池工房遺跡で大量(33枚)に発見されました。富本銭は、江戸時代の寛永10年(1798)の『古銭目録』に「富本七星銭(ふほんしちせいせん)」として図柄付きで掲載されておりその存在は知られていますが、古くから厭勝銭だと考えられていました。現在でも最古の流通貨幣の立証はまだできていませんが、日本最古の鑄造貨幣であることは確実でしょう。

このほかに金銭の『開基勝宝(かいきしょうほう)』、銀銭の『太平元宝(たいへいげんぽう)』なども試鑄されていますが(760年)、これらは銅銭とは異なり、広く流通したものではありません。この他にも私的に鑄造された「私鑄銭(しちゅうせん)」も製造されていますが、渡来銭と共に流通していませんでした。



★富本銭 (ふほんせん)

亀甲状の七星から「富本(七星)銭」とも呼ばれていました。



⑥承和昌寶(榑山遺跡出土)  
(じょうわしゅうほう)  
承和2年(835)

埼玉県内では、現在までに榑山遺跡でしか出土していない貴重な皇朝十二銭の貨幣(かへい)です。



①和同開珎 (わどうかいちん)  
和開元年(708)

②萬年通宝 (まんねんつうほう)  
天平玉字4年(760)



③神政開宝 (しんせいこうほう)  
天平神慶元年(765)



④隆平永宝 (りゅうへいえいほう)  
延暦15年(796)



⑤富壽神宝 (ふじゆしんほう)  
弘仁9年(818)



⑦長年大宝 (ちやうねんたいほう)  
嘉祥元年(848)



⑧饒益神宝 (じょうえきしんほう)  
貞觀元年(870)



⑨貞観永宝 (じゅうがねえいほう)  
貞觀12年(870)



⑩寛平大宝 (かんへいほう)  
寛平元年(889)



⑪延喜通宝 (えんぎつうほう)  
延喜7年(907)



⑫乾元大宝 (けんげんたいほう)  
天徳2年(958)

**注意** 大きさにもバラつきがあるため、各貨幣の見本写真の大きさは固定していません。また、承和昌寶は倍の大きさに拡大しています。